

文学館だより

令和 3 年 6 月 1 日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高



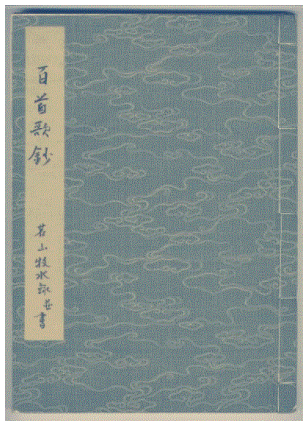
文学館の紫陽花が色づき始めました。(2021.5.19 撮影)
葉の揺らぎ、鳥のさえずり・・・と四季の移ろいをふんだんに感じ
ています。うっとりしいと思いがちな雨音にも、ちょっと耳を傾け
てみようかしらと思いを馳せつつ筆を走らせています。

三浦家寄贈資料公開展 見ごたえ満載です

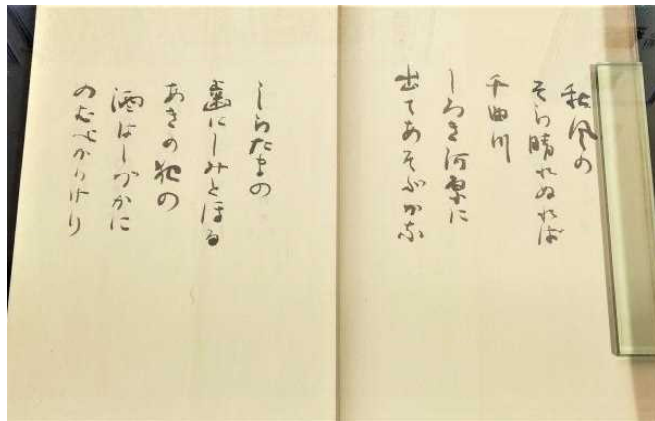
三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫 -受け継がれた二人の絆
第1期 プロローグ 敏夫の遺したもの

見どころ紹介

その2 ひやくしゅ かしょう
百首歌鈔 牧水直筆の歌 100 首本



表紙



100 首並ぶうちの 2 首 現在展示中

三浦敏夫に宛てた牧水の手紙が残っています。

「(略) 今後一二月のうちに、どんな方法でかお礼をしたいと思っ
てゐる、どうかそれを待っていてくれたまへ、(略) 今までの僕自身の作のうちから自分の気に入
った歌を百首だけ抜いてそれを何かの帳面一帖に書き取るか短冊にかくかして
お送りしたいと思っ
てゐる、(略)」
【大正 6 年 10 月 26 日付】

「(略) いよいよ一昨日より書きかゝりし所、初めてのこととて容易に書けず、
止むなく不本意のままに数だけをそろへ今日表装せむつもりなりしところ昨夜
電報、うろたへつつこのまゝ送り出します、まづいのはご容赦下さい、(略)」
【大正 7 年 12 月 5 日付】

こうして、牧水直筆による 100 首が敏夫に送られ、後に敏夫の手によって製本された
ものと思われます。牧水没後 10 年に当たる昭和 13 年に喜志子夫人が後書きを寄せてお
り、それも収められています。合わせて、表紙の題字『百首歌鈔 若山牧水詠並書』も
喜志子夫人の書によるものと付されています。

展示室では実物をご覧いただけるほか(写真右上) 縮小版複製を備えております。
直筆 100 首ほか喜志子夫人書による後書きを手にとってご観賞いただけます。

三浦敏夫とは・・・、牧水との絆については前月号にて紹介しましたので、今回
は省略しました。前月号は若山牧水ホームページにてご覧いただけます。

[若山牧水オフィシャルサイト](#)

[若山牧水記念施設](#)

[文学館だより](#)

ある日の投稿記事にほっこり

ある日の投稿記事が目にとまりました。
ほっこりをおすすめ分けてです。

6月で97歳になる父が短歌を始めたのは、88歳の時だった。(略)

あれから9年。父の短歌熱は衰えることがなく、分厚い辞書を片手に熱心に作り続けている。(略)

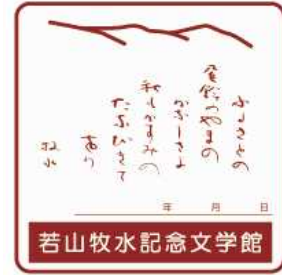
ある日「こん歌はどんげか」と感想を求めてきた。戦争の記憶を永遠に忘れない、という歌を、40年近い短歌歴の母と私があれこれ批評していると、父はニヤーツと笑い「永遠(とわ)に忘れじ、とは言っても、実際はあとちょびーっとやっちゃけどね。」自分の寿命を「あとちょびっと」と表現したことがおかしくて3人でおなかを抱えて笑った。

大好きな野球観戦に愛犬のこと、いつも雑草と格闘している家庭菜園と、題材はいくらでもあるのだから「あとちょびっと」と言わず宮日歌壇の最高齢掲載者を目指しましょう、お父さん。【宮崎市】

2021.5.10 宮崎日日新聞 掲載



来館スタンプ一新



牧水先生の1首を入れたくて数ヶ月。ふるさと尾鈴の山を詠んだ1首に絞り込んでようやくできあがりしました。

押印第1号は、日向市役所新規採用職員の皆さんでした。



文学館が華やかになりました

日向市のインドア花いっぱい応援事業を受け、(有)児玉園芸様(日向市平岩)より、オリエンタルユリが届きました。箱に収められた花の姿からも、同封されていたお便りからも丹精込めて育てられた生産者様の温かさが伝わってきました。一気に文学館が華やかになりました。ありがとうございました。



牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介します

とを にじぶ は やり か ぜ は や
十あまり二十に足らぬ家かずのこの山里に流行性感冒流行る

とおあまり にじゅうにたらぬ いえかずの このやまざとに はやりかぜ はやる

新型コロナウイルス情報がトップニュースを飾る昨今ですが、今から約100年前には全国的にスペイン風邪が大流行したといえます。(1918~1920)

牧水は、1918年(大正7)11月、群馬県谷川温泉を旅しており、こう記しています。

11月17日 雨 ねむりつくと案外によくねむれた。起きてみると、しめじめと時雨(しぐれ)が降っている。この頃毎朝のように降ってくるので、(略)きょうはとにかくゆっくり休むことにする。この谷川村は、はじめ越後あたりから出稼ぎに来ていた人たちが、いつとなく棲(す)みついて部落をなしたもので、今では戸数が二十くらいはあり、(略)ここがこの溪の行きどまりの部落で、これから上には一軒の人家もないという。(略)そこそこ散っている小屋の入口にみな七五三縄(しめなわ)が張ってある。聞けばこんな村にすら例のスペイン風邪がはやってきて、大半はやられているのだそう。(略) 『利根より吾妻へ』より

はやり感冒はらふといひて軒ごとに張れるしめ縄に雪つみにけり

はやりかぜ はらうといひて のきごとに はれるしめなわに ゆきつみにけり

歌集『くる土』に、この2首が並んで、収録されています。